論文の内容の要旨

氏名：村岡　宗一郎
博士の専攻分野の名称：博士（文学）
論文題名：A Synchronic and Diachronic Study on the Infinitival Selection in the Complement of the Causative and Perception Verbs of the English Language
（英語における使役動詞と知覚動詞の補文における不定詞の選択制限に関する通時的・共時的研究）

本論文の目的は、英語の使役動詞と知覚動詞の補文に出現する不定詞の分布とその使用に関する制約について、共時的・通時的に探ることである。（１）に示すように、現代英語の使役動詞と知覚動詞の能動態には原形不定詞が用いられ、格言的用法、韻律など音韻的な影響を受けている場合や文字通りの知覚を表さない場合を除いて、両動詞の能動態は to 不定詞を補文にとることができない。

（１）a. I {***made*** / ***let***} him {***cross*** / ****to cross***} the street.
b. I {***saw*** / ***heard***} him {***cross*** / ****to cross***} the street.

しかし、先行研究によれば、上記の使役動詞の能動態が to 不定詞を補文にとる例は通時的に存在した。
その一方で、使役動詞 let を除いて、現代英語の使役動詞と知覚動詞の受動態は、（２）に示すように、原形不定詞ではなく、to 不定詞を補文にとる。しかし、Visser（1973）などの先行研究によれば、（３）に示すように、原形不定詞を補文にとる使役動詞と知覚動詞の受動態の例もまた通時的にその存在が確認されており、この不定詞の選択制限は後期近代英語まで存在しなかったという。

（２）a. He ***was made*** {****cross*** / ***to cross***} the street.
b. He ***was seen*** {****cross*** / ***to cross***} the street.
c. He ***was let*** {***cross*** / ****to cross***} the street.

（３）a. he, which hath his pris deserved ... ***Was made begin*** a middle borde.
(c1390 Gower, C. A. VIII, 720; Visser 1973: 2409)
b. þe britons ... ***wer sene Hald*** aunciene custum. (c1350 Castleford (ed. F.Behre) 21358; ibid.)

本論文は、現代英語において、これらの不定詞の使用にはどのような制約が課されているのか、そして両動詞の能動態および受動態の不定詞補文に課される制約は英語の歴史の中で、いつ、どのようにして確立したのかを明らかにした。
第 1 章では、本論文で取り扱う使役動詞と知覚動詞の統語的類似性について紹介した。現代英語において、使役動詞と知覚動詞は、一部例外はあるが、補文に出現する準動詞の分布には類似性が確認されており、各準動詞が表すアスペクト特性においても共通点が見られる。その一例として、（４）に見られるように、両動詞の原形不定詞補文は当該事象の完結性を表し、現在分詞補文は当該事象の非完結性や一時性を表す。

（４）a. We {***made*** / ***saw***} them ***march*** into the mess hall. [completed]
b. We {***had*** / ***saw***} them ***marching*** into the mess hall. [incomplete]

さらに、この準動詞の分布とアスペクト特性の類似性に加えて、使役動詞と知覚動詞は共に、その補文に補文主語（本動詞の目的語）が義務的に出現する。このことは、虚辞である it や there が出現すること、音形を持たない代名詞 PRO の出現が認められないことが挙げられる。さらに、主節主語と補文主語が同一である場合にも、再帰代名詞（照応詞）の出現が義務的となる。この再帰代名詞の出現においても、使役動詞と知覚動詞に共通性が見られ、補文内部の束縛現象とその局所性をもとに、両者は同等の統語構造を持っている可能性について言及した。その他、補文内部要素の移動現象とその容認可否性においても多くの共

通性が確認されており、使役動詞と知覚動詞の補文には、補文内部の叙述関係を語順によって表示する Predication Phrase と補文内部の準動詞に形態素とアスペクトの意味素性を付与する Aspect Phrase という機能範疇があることを議論した。

第２章では、使役動詞の補文に出現する不定詞の分布について議論した。まず、現代英語における使役動詞の補文に出現する原形不定詞は同時完結性と使役事象の結果性を表す一方で、to 不定詞は、非同時完結性と使役事象の過程性を表すことを様々な先行研究の例を通じて確認した。そして、使役動詞の能動態の補文に出現する不定詞の分布について、共時的な観点から分析を行い、本動詞である使役動詞の意味と不定詞の使用に共通性があることを示し、表 1 に示す使役動詞の意味に応じて、不定詞が選択されていることを明らかにした。

図１．不定詞を補文にとる使役動詞の意味

使役動詞	使役主	被使役主
make 使役構文	強制・直接的働きかけ	抵抗あり
get 使役構文	説得・苦労／努力	抵抗あり
have 使役構文	社会的、習慣的な制御力による指示	抵抗なし
let 使役構文	無干渉（許容・放置）	抵抗なし

そして、その例外となる表現が通時的に確認されることについては、使役動詞 make や let は元来、現代英語に見られる強制使役や放置・放任（許可）の意味を確立しておらず、様々な使役事象に使われていたために、それに応じて補文に使われる準動詞にも多様性があった。しかし、近代英語以降、使役動詞の意味が確立すると、それに応じて使用される不定詞もまた確立していった。このうち、使役動詞 make は、近代英語以降、強制使役の意味を確立すると、それに伴い、その強制の意味に応じて、同時完結性を表す原形不定詞を補文にとるようになったのである。その一方で、現代英語では非文法的と見なされる to 不定詞を補文に取る使役動詞 make は（５）に示すように、同じく to 不定詞を補文にとる cause へと変化し、その後、衰退していった。

（５）a. And the Lord God shal take Irael `to her enemyes, for the synnes of Jeroboam, the which synnede, and ***made*** Irael ***to synne***. (Wycliffe Bible Late Version. 1 Kings 14: 16)

b. And he shall give Israel up because of the sins of Jeroboam, who did sin, and who ***made*** Israel ***to sin***. (Authorized Version. 1 Kings 14: 16)

c. He will give Israel up because of the sins of Jeroboam, which he sinned and which he ***caused*** Israel ***to commit***." (New Revised Standard Version. 1 Kings 14: 16)

次に、現代英語における使役動詞の受動態とその補文に出現する不定詞の分布については、強制使役を表す使役動詞 make は受動態になることで、被使役者による強制使役に対する迷惑や抵抗を含意する。そのため、迷惑や抵抗という使役事象の過程性を表す為に、過程性を表す to 不定詞が用いられる。このことは、（６）に示すように、使役行為における苦労や努力を含意する使役動詞 get の受動態にも見られる。

（６）a. They ***were got to be*** careful.

b. *They ***were got be*** careful.

その一方で、強制使役を表さない使役動詞 let は、make と異なり、被使役者の迷惑や抵抗を含意せず、使役事象が自発的かつ同時完結的に引き起こされることを含意するため、(2c) に示したように、受動態の補文においても原形不定詞が用いられる。使役動詞 make の受動態もごく稀に原形不定詞を補文に取るが、make がもつ強制使役の意味と原形不定詞の同時完結性により、to 不定詞が使用される場合よりも、かなり暴力的な表現として解釈されてしまうため、その使用頻度は少ない。このような言語事実から、使役動詞の能動態と同様に、使役動詞の受動態もまた使役動詞が表す意味に応じて、不定詞が選択されていることを指摘した。先に述べたように、この受動態の補文における不定詞の選択制限もまた通時的には不安定であったが、使役動詞の能動態と不定詞補文の分布における通時的分析と同様に、使役動詞の受動態もまた、元

来現代英語に見られる意味を確立しておらず、その意味に応じて、不定詞の選択が自由であった。しかし、近代英語以降、図１に示すように各使役動詞の意味が確立することにより、現代英語に見られるような不定詞の選択が確立したことを実証した。

第３章では、知覚動詞の補文に出現する不定詞の分布について議論した。まず、知覚動詞の能動態の補文に出現する不定詞の分布について共時的に調査し、知覚動詞の補文に出現する原形不定詞は同時完結性、知覚事象の結果性（直接知覚）だけでなく、(7a) に示すように、その同時完結性を反映した強い直接証拠性を表す可能性について議論した。その一方で、to 不定詞は、be や have を用いた表現に限り、(7b) に示すように、非同時完結性、知覚事象の仮定性（推量や間接知覚）に加え、非同時完結性を反映した弱い直接証拠性を表すことを様々な先行研究の例を通じて確認した。

（７）a. I ***saw*** him ***walk*** across the road.【Direct Evidentiality: Strong】
b. I ***saw*** him ***to be walking*** across the road.【Direct Evidentiality: Weak】

そしてこの原形不定詞に見られる同時完結性の意味は後期近代英語以降に確立したことを各種通時的コーパスを用いて実証した。その一例として、近代英語では（８）の例が検出されたが、（９）に示すように、現代英語ではこのような表現は非文法的と見なされる。

（８）a. whensoeuer wee ***see*** the church ***stand*** in neede of our helpe, (EEBO. 1583)
b. you shall ***see*** a castle ***stand*** at the foote of the hill then you come to the Towne of santos, (EEBO. 1625)

（９）a. *We ***saw*** Rome ***stand*** on the Tiber.
b. *We ***saw*** the church ***stand*** on the hill.

このような調査結果から、近代英語までの知覚動詞補文に出現する準動詞は現代英語に見られるアスペクトおよびそのアスペクトを反映した証拠性を表していないことを明らかにした。その一方で、知覚動詞の能動態に見られる to 不定詞については、近代英語では原形不定詞と to 不定詞に見られる意味の違いもまた曖昧であり、近代英語以降、原形不定詞が現代英語に見られる意味を確立すると、to 不定詞もまた推量や間接知覚を表す場合にのみ使用されるようになったことを示した。

一方、知覚動詞の受動態と不定詞補文の関係性については、知覚者である主節主語が省略されていることから、知覚動詞の受動態自体が弱い直接証拠性を表す可能性について言及した。そして、知覚動詞の受動態の補文に出現する不定詞は、能動態の場合と同様、(10) に示すように、そのアスペクトを反映した証拠性を表すと仮定した。

（10）a. *He ***was seen walk*** across the road.【Direct Evidentiality: Strong】
b. He ***was seen to walk*** across the road.【Direct Evidentiality: Weak】

知覚動詞の受動態は弱い直接証拠性を表すため、それに応じて、同様に弱い直接証拠性を表す to 不定詞を補文にとる。しかし、原形不定詞はその同時完結性を反映した強い直接証拠性を表し、知覚動詞の受動態と意味的に矛盾するため、知覚動詞の受動態は原形不定詞を補文に取れないことを実証した。この現代英語では容認されない原形不定詞補文をとる知覚動詞の受動態が近代英語まで存在していた要因については、前述の通り、知覚動詞の補文に出現する準動詞のアスペクト特性は後期近代英語まで曖昧であり、そのアスペクトを反映した証拠性もまた後期近代英語まで曖昧であったため、原形不定詞補文をとる知覚動詞の受動態が近代英語まで使用されていた。

第４章では、第２章から第３章で得た調査結果から、使役動詞と知覚動詞、そしてそれらの補文に出現する不定詞は共に後期近代英語まで意味的に曖昧であったが、後期近代英語以降、原形不定詞が同時完結性の意味を確立するにつれて、使役動詞あるいは知覚動詞の意味に応じて、不定詞の選択が制限されるようになったことを明らかにした。